



孕ませ魔道具で犯してみた

幼なじみの
金髪
巨乳

メイドさんに
フラれた
ので



俺はごく普通の日本人だ。
たったひとつ普通と違う特別があるとしたら、
曾祖父が異国の魔術師という信じがたい事実…。

彼女の名前はエリシア・サウスゲート
うちの一族が魔術師だったころ、彼女の一族と末代まで続く
『使い魔の契約』という儀式をしたらしく
彼女はその契約を律義に守り幼き日に来日し俺の側に仕えている。

そう俺の唯一の特別は、
幼なじみの専属メイドさんがいる事だ。



「おはようございます♡ご主人様」

舞い込む朝日の中、愛らしい彼女の明るい声が部屋に響く。
来日してから10年にもなり、外国人訛りはほとんどなくなったが、
まだ少し甲高い訛りが残り、
鈴がなるような可愛らしい声になった。

「もうすぐご飯できますからね♡」

エリシアは当たり前のように俺の身の回りの世話をしてくれる。
でも俺にとってエリシアは当たり前前の存在じゃない…。

彼女は俺にとって他の誰でもない

たったひとり特別な存在だ





「エリシア…もうすぐ」

誕生日だね…何が欲しい？

俺は何でも出来る…君のためなら…」

こうやって想いを伝えるのは何回目だろうか…

でもエリシアは明るい表情を曇らせて言葉少なく淡々と…

「困ります…」

「愛してる…君にそんな顔されたら…俺は胸が苦しい…」

そんな言葉もすべてエリシアの表情の影をただただ暗くするだけだった

俺はエリシアの胸に手を置いた…
それは彼女の性格と同じように柔らかで暖かだった…。
でもエリシアは身体をビクッと震わせてこわばって固まった…。
そしてエリシアは決定的な言葉を発した。

「私…ご主人様をそういう風に思えません…ごめんなさい…。」

俺に彼女は特別だった…だが彼女にはそうじゃなかった



エリシアは自慰行為に耽る

エリシアは不安なことがあると、彼女の部屋にこもり自分の体を触り思春期の不安な自分を慰める。13歳の頃からある彼女の悪癖…

「あっ♡」

「んんっ♡」

漏れる

喘ぎ声…

やや狭い日本の家では
エリシアがどんなに小さく声を抑えても、
隣の俺の部屋に愛しい彼女の悩ましい声が届いた。
そのたびに異国で暮らす彼女の不安を感じて
俺はその声を聞こえていないふりをして、
そのあと自己嫌悪に落ち込む彼女に優しく接した。ムッ

それはどこかでエリシアは
自分を想いながら自慰に耽っていると
根拠もなく信じていたからだ

そうじゃないと知った俺は違う…。

エリシアは俺じゃない誰かを想い…俺との生活に不安を感じ
俺以外の誰かとの生活を妄想し、俺の隣の部屋で

欲望に耽っていやがるんだと思うと俺の優しさが消えていった。



押し入ってめちやくちやに犯してやりたい

そんな歪んだ妄想で隣室の俺も合わせるように
自慰行為に耽る。

彼女をレイプするのくらい

簡単だった。

だがレイプすれば

当然エリシアは

居なくなつて

しまうだろう。

エリシアがいない人生なんて考えられない

レイプすれば彼女は去るだろう。

だがレイプしなくても、彼女はほかの誰かに奪われる。

歪んだ自慰行為の中で、俺はエリシアを孕ませることを
考えた。

敬虔な宗教家でもある彼女は

中絶は絶対にしない。

そして強姦魔であろうと嫁ぐだろう。

俺は愛する彼女とそんな方法でしか、側に居れないと
漏れ聞こえる彼女の喘ぎ声と自分の性的な昂ぶりの中で、
思い込んでしまっていた。



そら豆にも似たようないびつな形状の植物の種子

魔術師としての力を俺の一族は失ったが、魔術道具と言う

骨董品のような道具が大量に家にはあった。

その種は、術者の精液をかけることで発芽し、

内部で精液を培養し、

想い人にその精子を

種付けし必ず

孕ませると言う

物だった。

信じていたわけじゃない

だが俺は彼女への愛をそんなものに

ぶつけることでしか表現できないほど

歪んでしまっていたのだ。

あめん♡

俺は漏れ聞こえるエリシアの

絶頂の声に合わせて「孕め！」と想いを込めて

精液をドクドクと種にかけ続けた…



それは何かのゲームで土管から出てきそうな植物

ご主人様は私の誕生日に、少し変わった植物をくれました。

お仕えして最初の誕生日にくださったのが、

ゼラニウムの花でした。

それ以来の植物のプレゼント

私はご主人様が大好きです。

初めての恋

貰ったゼラニウムが

枯れた時、子供すぎて

号泣してしまいました。

大好きなご主人様と

上手くいかないとき

拗ねたり怒ったり、

メイドとしてあるまじき

感情的な行動が

ありました。

好きと言う感情を封印する

子供だった私はいっぱいご主人様を困らせて、

たくさんケンカもしました。恋とメイドふたつを

両立することは難しくて毎日胸が苦しくなりました。

だから私は恋してる気持ちを考えないことにしたんです。



でももう封印はいらないのかもしれないかもしれません

もうエリシアはこの国で結婚できる年齢になりました。

大人になりました。そして大好きなご主人様と

相思相愛になりました。

初めて好きって気持ちを

意識した日を思い出して

私は気持ちが変わり

行くのを感じます。

好きって気持ち

伝えなくちゃ

私独占欲強いですよ。

私わがままですよ。

私かまってちゃんですよ。

ちよっとエッチですよ。

毎日キス絶対ですよ。

長いトリセツと一緒に
大好きって伝えます。
いますぐご主人様の所
に行かなくっちゃ！



でも気が付くと異形の植物が
ご主人様の所に行こうとする私の腕に絡みついています。

身体を固定していくように

身体の柔らかい部分に食い込み、
植物のツルが巻き付いています。

痛くない…でも動けない…そんな力加減で、
調度よく女の子が動けない方法を知り尽くして
いるように手首…前腕…そして二の腕…

確実に私の体の目的地に向かって、
植物は進んできました。

この植物は女の子の柔らかい部分が好きなのです。

胸に向かって進む植物に私はそう理解しました。



ツタは胸に巻き付いてきます…。

んっ♡

ゆさっ
ゆさっ

それは柔らかさを確かめるように

腕の締め付けと同じ強さで

締め上げられる覚悟で身構えた私は、

ただただゆるく巻き付いて胸を揺さぶるツタに、

小さく吐息を漏らしました…

ツタは簡単に服を破きます。

強くではなく、胸に巻き付いたツタは

ドロツとした粘性の液体を出すと、

服は溶けるように消えていきます。

植物は楽しむように胸だけを露わにしました…



徐々に胸の締め付けが激しくなっています。

苦しくて吐息が漏れて、それに悦ぶようにツタは、強く胸に食い込んでさらに胸の形を変えていくのです。

植物は私の顔の前まで来ていました。

私はここまで叫ぶこともできず

されるがままでいました。

今の姿をご主人様に見られなくなかった事と、

ご主人様が私がこうなると知っていて植物を

プレゼントしたと思いたくない事。

単純に恐怖もありいろんな感情で

声を出せずにいました。



ハァ♡ハァ♡

口腔内に侵入する植物

植物は私が口を開くのを待っていたのです。
ご主人様…と発するまでもなく私の開いた口に
植物は侵入し穢しました。

トゲがある植物

植物には茎に突起があり、その尖った形状の
それは私に強い痛みを想起させた…
でも逆にその突起は振動し曲がり私の口を
優しく柔らかく広げ私に噛むという
抵抗すらさせないくらい、女の子の中に
入るという術を知り尽くし
ていました。



薔薇園の空気を濃くした様な匂いの甘い液体

植物は茎を痙攣するように震わせて私の中に
液体を射出しました…

多くが喉の奥に入り身体の中に染み込みました。
入りきらなかったわずかな量であるはずの液体が
ビュルッと音を立てて口から吹き出します…

抜けていく力…昂る鼓動…火照る身体…

液体が私の身体にもたらした変化が何か

私は知っていました…

それは性的な興奮をもたらす作用がある

液体だったのです。



力が抜けて崩れ落ちる私

その私の足をしっかりと掴み持ち上げるように、ツタが絡み誰にも穢された事がない秘部が見えるように足を持ち上げました。

声が出ません…力が入りません…

身体が火照ってマヒしたように痺れて動かないのに感覚だけが鋭敏になったように少しの締め付けでも過剰に脳まで痺れるような信号が届きます。

舌がうまく動かないで

そのひとつひとつに喘ぎ声が漏れました…

ハァハァハァ

私が抵抗できなくなると植物は秘部の方へ向かいました。

足を閉じようと試み、身をよじり動かない身体で精一杯逃れようとする私を笑うように植物はビクリッとその茎を震わせていました。



ビュルという独特の音を立てる粘性の液体
植物は狙いを定め、私の下着の方に頭を向けると

大きく茎全体を根元の方から震わせて大量の粘液を
私の下着にかけました。

下着はすぐに溶けて消えます。

露わになった私の性器に同じ粘液を何度も

音を立てて植物は吐き出しました。

ヒリヒリと染み込んでくるような

軽い電気のような感覚…

内側からあふれてくる私の愛液

粘液は染み込むと、私が知らなかった感覚神経を呼び起こしていききました。

そのたびに誰も辿り着いたことがない奥の方までよじれるように蠢いて

同時に私の愛液が溢れ出すと、粘液と混ざりその効果を和らげて痙攣しそうになる膣を守りました。



気が付くと、目の前に
ご主人様が居ました。



私の
ご主人様
愛しい王子様

伝えなきゃいけない
大好きって言葉は
麻痺して動かない舌で
ただの喘ぎ声に変換されて
発せられました。

でもこれで助かると私は思いました……。

「愛してる…だから…」
「ごめん…エリシア…」

言葉が理解できなかったのです。

理解する前に、ご主人様の少しザラっと乾いた舌が私の乳首の突起を触ります。敏感になってる私の身体はそれだけで何も考えられないほどの感覚情報を全身に走らせて私の身体に激しい震えを走らせました。

「ご主人様は思い悩むと口が乾きます…」

これがどんなに思い悩んだ行動か…
ぼやけた頭でもよくわかりました…
いつもなら紅茶をお出しするところなのです…



ご主人様愛しています

いっぱい夢がありました。

恋人になって初めてのデートはいつもの動物園がよかったです…。
ちよっと歩いて猛禽類のコーナーで手を繋ぎます。

そこからはご飯の時もずっと指を絡めて何度も大好きって
伝えたいです。

帰宅してギュって抱き着いて…それから私は目を閉じます…

そんな夢をすべて壊すようにご主人様は

私が見たことないような形に変わった性器を露出させて
私のジンジンと痺れた性器の方へ運んできたのです…





「ご主人様の性器が私の膣にあてがわれました
愛液で溢れていた私のそこはご主人様の性器に蜜をたらし
そのいびつな形の愛を受け入れるように思えました！」

初めての証の処女膜



処女膜の硬さにご主人様は身体を止めて
安堵の吐息を漏らしました……
でもその安堵でもご主人様は止まることがなかったのです。

じわ……

ググ

無理やりに腰を沈めるように

ご主人様は私の性器に向けて全身を躍動し
体重を速度に乗せて私の狭い膣に分け入って来ました。
一回ごとに何ミリかずつ確実に深く深く
何度にも分けて私の処女膜は破れていきました…

激痛で漏れ出る私の声

んっ!!

チリチリ

痺れて鋭敏になっている私の身体はその破瓜の痛みを
何倍にもして脳に伝えて私はその回数分嗚咽に似た喘ぎをあげたのです…



ご主人様の大きな性器が痙攣するのを感じます
激しい腰の動きで半分ほど膣に性器が埋まった頃でした…
破瓜の割れ目から真っ白い精液が噴き出るのが見えました。
そして破れた膣の奥にそれがしみていくような感覚を
鋭敏な体がゆっくりと脳に伝えて来ました…

愛しています…ご主人様…

不器用なその姿はご主人様も初めてだという事でしよう…

私はうれしいのです…どんな形でも愛する人と初めてを共有できた事に…
だから言葉にしたい「愛してます」と…でもそれは言葉になりませんでした

ビュル

ビュル



「ご主人様は「孕ませろ」と植物に命令をすると
目を背けました…

数を増している植物は血が滴る私の膣に粘液を塗りつけました。
瞬く間に血が止まり痛みが消えるのがわかります…。
でもそれは優しさではなく私を凌辱するための準備でした…

絶望でした

この行動も全部ご主人様の間違った愛情だって
信じたから受け入れられていたのです…
今からただこの化物に愛もなく
犯されるのだって
思いました…

ぐるぐると遠慮なく巻き付いてくる植物

ご主人様の拙い性行為と違い植物は私の身体の敏感な部分を
知り尽くし感じる部分を這うように辿り…
身体は快感がうねりと同時に這うように巡り…
その快樂の沼に沈んでいくような感覚は…
愛液で湿り開きやすくなった膣を簡単に緩めていきました…





植物は先端部の突起で私の入り口を押し広げました
処女膜もなく緩んでしまっている私のそこに
植物は粘液を勢いよく注入しました！

まるで内臓がめくれていくような感覚
膣の中の眠っていた私の感覚神経へ向けて
媚薬のような感覚を起こしていく液体が
流し込まれていくのです…

その今まで知らなかった感覚に
膣が閉ざされた内臓ではなく性を受け止め感じ取る
別の器官であるとする脳は理解しました…
脳の理解は私の感情を置いて官能的な悦楽を生んでいきます…



狭い腔を押し広げるように
植物はとげとげしいその先端を
私の新しく開けた器官に差し込みました

先端のトゲのような突起

トゲは腔内に入ると蠢いては
私の苦しくて入りづらいヒタを
一枚一枚めくりながら先端部を
奥へ奥へ進めていきます…

その動きは優しく丁寧でいて
私の腔内の感じやすい所を見つけると振動し刺激し
私をより官能的な悦楽に導き
身体の愛液の分泌を助けるとそれを纏い
より艶めかしく一番奥へと進んでいきました…。



「ああ……あ……ああん♡」

奥までたどり着いた植物は茎から先端にかけてうねるように激しく震えそれが私の目覚めたての性感帯を激しく揺さぶりました…

ヴ
ヴ
ヴ
ヴ

パ
パ
パ

絶頂まで一瞬…

激しく身体を巡る悦楽の奔流
大きすぎるそれから逃れようと
反射的にのけ反る身体…意思と関係なく
蠢く身体への反応に私は弄ばれていました。



私の中に吐き出されました

植物は私が絶頂に達し膣の奥が受け入れられるように広がるのを確かめると
今まで異なるドロドロしたモノを吐き出しました…
ジンジンと熱を帯びる私の子宮がそれが何かすぐ理解しました…
すべて吐き出すと茎は萎むように枯れていきます…

次々とまるで私の中に精液を吐き出すために
生まれた生物であるかのように…

植物は続々と生まれ、そして私の中に侵入し

私を絶頂に導くと精液を吐き出し枯れていききました。

その行為の数々に頭はぼやけていく中で快楽に痺れる膣のさらに奥の
子宮がどんどんうずいていくのがわかりました…



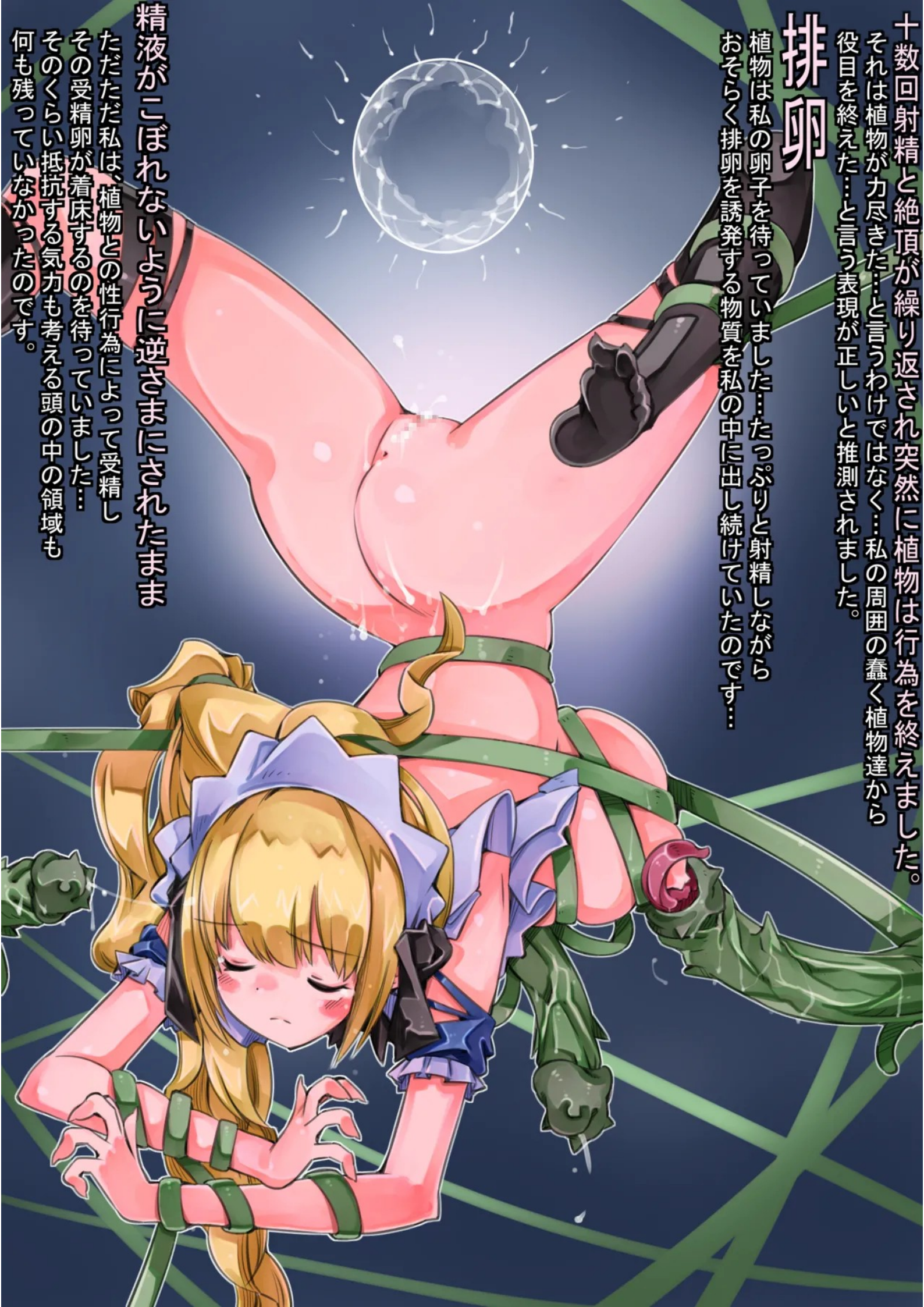
十数回射精と絶頂が繰り返され突然に植物は行為を終えました。
それは植物が力尽きた…と言うわけではなく…私の周囲の蠢く植物達から
役目を終えた…と言う表現が正しいと推測されました。

排卵

植物は私の卵子を待っていました…たつぷりと射精しながら
おそらく排卵を誘発する物質を私の中に出し続けていたのです…

精液がこぼれないように逆さまにされたまま

ただただ私は、植物との性行為によって受精し
その受精卵が着床するのを待っていました…
そのくらい抵抗する気力も考える頭の中の領域も
何も残っていないかったのです。



突然膨らみだす腹部

行為が終わると思っていた私は突発的な体の変化に激しく叫び声をあげて身をよじりました
痛みと言うよりも違和感が腹部で大きくなるような理解できない感覚への恐怖でした…
でもすぐ私は力を抜いて身をよじることをやめたのです。

ド
ン
ッ

お腹の中で膨らむ命

それが何かは理解できなかったのです…
でもそれは母親としての本能とでも言うか
暴れてはいけない事を私はすぐ理解しました…
私はこの命を出産するのです…



腹部で孕んでいる胎動

その命がへその緒で繋がっていて

お腹の中に命があることを感じます…

そしてそこに私とは別に植物は管のようなもので

へその緒と異なるエネルギーを注入し

命を強制的に短時間で成長させていました…

身体が変化していく違和感

その管が注入しているのは私にも…でした。

身体がずっしりと重たく骨から広がっていき

変化に自分の身体でないような感覚がしていました



張ってくる胸から母乳が出ます

身体に母親として必要な事が
揃っていききました…

この植物はとて丁寧に私に種付けし
私がその命を育てていけるように整えたのです…

もうあとは分かっています
出産するだけでした

1:12



気が遠くなるような時間をかけて
ここまで早送りで母親になった私が
ここからは普通に辛い出産をしたのです…
何の覚悟も知識もなく
背中を向けてるご主人様の側で…
でもその罪悪感を感じてる背中を見て
お腹の赤ちゃんがご主人様との子供だって
信じれたから私は頑張れたのです…
全ては愛です♥



落ちてゆくような感覚
胎盤と言う臓器が身体からはがれて落ちる
身体から抜けていく感覚は絶叫系コースター
のその落下に似てその快感と同時に出産が
終わったのを知りました。

解放される身体

私を妊娠出産させるのが役割だった
その植物は私を解放すると
元の種に縮むように
シユルシユルと
戻っていききました…

そして隣に新しい命だけが

残りました…



「お帰りなさい♡」主人様

授乳中のご主人様の帰宅！

最初は少し気恥ずかしかったご主人様の前での授乳もいつの間にか慣れて普通の夫婦の光景になっていました

「ご主人様は旦那様

ご主人様には何度も怒っていないかと聞かれました！

私とご主人様との使い魔の契約は本来あいう行為をすることの契約でただのメイドさんとしての生活の方がとても幸せなだけでアレが本来の役目ですから

怒る必要もなかったのです。

夢見た初めてじゃなかったですけど

アレはアレで他の人じゃできない

レアな初体験と割り切れれば

なんてことなかったのです。

そしてアレから

たくさん愛を確かめて

夫婦になったので。

私はとても
幸せ者です



でも「主人様はとても大変です

私は元々ひとりでエッチが好きでよくしちゃうくらいとても敏感な身体だったのですが…

それが魔法の道具によってより敏感に開発されたのです。

簡単に言うと私は

毎日3回はエッチをしないと

満足できないくらいの

エッチ依存症になるという副作用が残ってしまったのです♡

「というわけで…

お風呂と「飯の前に

エッチですよ♡

ご主人様♡」

